

インド◎貧困と環境問題

●インドの貧困の構造

インドは一人当たりのGNPが三〇〇ドルにとどくかとかないかというところにいる。三〇〇ドルだから貧しいと一概にいえるかどうかは問題である。逆にいえばGNPが増えることが貧困からの脱脚の唯一の指標ではないであろう。しかし、インドに膨大な貧困が蓄積されていることには疑問の余地がないと思われる。そのように考えなければ、貧困という言葉それ自身が意味を失うであろう。

このようにインドが貧困であるということを受け入れるとして、ではその貧困はどのような構造をもつものか。因果関係や相互の関連の追求は別にして、インドの貧困の特徴を箇条書的にあげるなら、およそ次のようになるであろう。

- ①土地の上層農民への集中。人口に対する土地の不足。耕地の細分化と小規模保有地の急増。
- ②農業生産の変動が激しい。
- ③森林と土壌の状況の悪化、過放牧、洪水と旱魃の頻繁化、これらと関係して農業用インプツ

トの生産性の低下。

- ④ 地表水（とくに小規模水力）の利用率が低い。関連して灌漑も不十分。
- ⑤ 政府による研究開発が農業や環境保全に比べて原子力などを重視。
- ⑥ 高等教育の伸びに比べて初等中等教育の普及が遅い。高等教育における文科偏重とその結果としての卒業生の雇用問題。
- ⑦ 識字率がまだ低い（とくに女子）。文盲数の絶対的な増加、成人教育の遅れ。
- ⑧ 死亡率の低下に比べて幼児死亡率の低下が遅い。関連して飲料水の安全性の問題、医療制度の問題（都市への集中、治療の偏重と予防の軽視）。
- ⑨ 合計特殊出生率がまだ高い。
- ⑩ 経済運営の非効率（使用エネルギーの生産性低下、灌漑の非効率など）。
- ⑪ 財政赤字（軍事費増加、農業所得が非課税、間接税中心などによる）、インフレ。
- ⑫ 八〇年代に入り、工業はかつてない持続的成長をとげているが、個人消費の伸びの最大のものは都市中所得層の増大による乗用車、二輪車と耐久消費財で、人口の圧倒的部分に有効需要がない。
- ⑬ トリクル・ダウン（したたり効果）の起こり難い社会構造。

● 貧困と環境問題

ここにあげた一三の項目は複雑に関連しあっているが、とくに③にあげたことを環境問題とし

て取り出すことができるであろう。そこに④、⑤、⑥、⑦、⑩、それに多分①の要因も加わって②の現象が起きる。その結果、⑫にみるように農業と工業のリンクを欠くことになる。

インドの一部のプランナーたちは、農工間のリンク欠如をむしろ正当化してインドの工業はたとえ農業が不振でも立派に成長しうる、いまやそれは独自の発展の原動力を獲得したといっているが、いささか本末転倒の議論であろう。そのような工業の成長が長続きするはずはないからである。

③にあげた環境問題とは、森林の伐採が進み、過放牧とあいまって、一方では土壌が急速に浸食され、土地の保水能力がなくなるため、雨季に洪水が起きやすくなり、その後急速に旱魃がくる（農業用インプットの生産性低下はこれらの結果であろう）、他方では家庭燃料の薪が不足するため、有機肥料として消費されるべき資源が燃料として消費されることになるし、さらには高価な商業的エネルギーに頼ることを余儀なくされる、ということである。

これらの過程を通じて農村の中下層住民の生活が重大な脅威にさらされている。問題の基本にあるのは、森林の減少、およびこれと関連する土壌の浸食である。砂漠化といってもよいだろう。森林の減少は現在も進行中であって、このままではあと三〇年もすればインドから森林がほぼ消滅するものと思われる（その根拠については、鈴木長年編『日本の経済協力』アジア経済研究所一九八九年刊所収の拙稿「環境—インドを中心として」を参照）。念のため、二つほど注釈を加えておきたい。

一つは、いま普通に問題にされているのは熱帯雨林の減少ということだが、インドの森林は熱

帯雨林とは異なるということである。部分的にはそのように呼ばれてよいものもある。しかし大部分はアマゾン、東南アジア、西アフリカなどの熱帯雨林地帯よりもはるかに雨量の少ない地域の森林であり、熱帯雨林と呼ぶのは適当でない。ただし、右に述べた森林減少や土壌浸食の破壊的な影響は熱帯雨林の場合と異なるところはないと思われる。熱帯雨林も全体としてあと四五年ほどで絶滅するとされていることは周知のとおりである。

もう一つは、このこととも関連するが、インドの森林の減少は輸出によるものではないということである。それは、もっぱら内需の結果であり、したがって幸いに日本の責任を云々する必要はない。内需でとくに重要なのが家庭燃料だが、同時に都市部での建築用材や家具の需要も馬鹿にならない。後者については、需要の所得弾力性が高いといわれている。先の⑫で述べたような都市中所得層の増大に見合うものである。

●展 望

失われた森林を再建する場合には、できるだけもとの形に復元するのが望ましいとされる。しかし立木がすっかり切り払われるなら、復元は困難になるし、土壌の損失も取り返しのできないものとなりかねない。したがって伐採は選択的になされねばならないし、万一すっかり切り払われた場合にも時を移さず植林が行われる必要がある。このような点からみるなら、インドの森林はかなり憂慮すべき状態にあるといわなければならぬ。

その土地その土地に見合った植林を大規模かつ直ちにしなければならぬだけではない。過放

牧をどう抑制するか、表土をどう回復するか、代替エネルギーをどこに見出すか、人口増加を緩和することが可能か、などの問題がみな関連してくるので、早急には解決を見出すことが難しい。要するに、ここでは先に述べた貧困の諸側面を考えながらこれまでの方向を抜本的に再検討して発展のための別個のシナリオを作ることが求められているのである。

南部インドのカルナータカ州政府は、共同の厩舎を作つて過放牧を抑えながら植林を進めていくことを含む「総合土地利用管理計画」を日本からのODAを得ながら実施しようとしているが、今後のための一つのモデルとなる可能性をもつものであろう。

(山口 博二)

パキスタン◎インダス河水系の苦しみ

インダス河水系は、パキスタンの血管網であり、その豊かな水はパキスタンの血である。超乾燥地帯の現パキスタン地域で、四〜五千年もの昔、モヘンジョダロやハラッパーに代表されるインダス文明を育くんだのはこの水系であったし、最近では、一九六〇年代の「緑の革命」を支えたのもまたこの水系であった。

かつて、百年以上も前に、イギリスはインド植民地の現パキスタン地域、とくにインダス河流